

習熟度コース別学習アンケートからの考察

- 1、コースについては生徒本人が選択したが、その選択した理由がBコースとCコースで大きな違いがある。Cコースでは自分がこれから取りたい成績や身につけたい学力で判断している。それに対してBコースの生徒は2年生の時の成績で判断している。この選択した理由がBコースとCコースとも生徒の授業への取り組みに大きく現れている。授業への積極的な取組となって、集中した取組になっている。
- 2、ガイダンス期間の時に、Bコースにいた生徒に授業の内容の説明を聞き、Cコースに行ったほうがいいのかと勧められた生徒は誇らしげにうなずき、その後の授業でもよく取り組み、自分でもがんばられているのでCコースにいったよ良かったと報告してくる生徒がいる。授業への取組、学習への取り組みが非常に前向きな姿勢を保つ努力が見られる。
- 3、ガイダンス期間に十分にCコースで取り組める生徒が、説得にもかかわらずにBコースに移った生徒がいる。Bコースの授業の中では、ゆとりがあるため、余裕を持って取り組んでいる。ゆとりがあってリラックスしての取組のため、必死になって取り組んでほしい生徒にもその雰囲気伝わっている。
- 4、習熟度コース別学習になって授業の中でわかったということが増えてきていると認識している生徒が3教科とも半数を超えている。特に数学、英語のBコースでは70%を超えている。中間テストや期末テストの平均点ではBコースとCコースでは大きな差があるが、授業の中でわかったと感ずることができるというのはこの習熟度コース別学習の大きな成果と言える。

* 参考

Bコースの平均点	40~50点
Cコースの平均点	70点~80点

生徒も授業の中で理解できた実感できることは、授業への取組にも意欲的になるし、やる気もでて、さらにいい効果をもたらしていくものにつながる。

- 5、習熟度コース別学習になってわかったということが減っているという割合は10%に満たなく、そして彼らその原因と考えるのは自分の努力不足、家庭学習の不足を上げている。

それに対して理解できたことが増えたと感じている生徒は自分の努力と習熟度コース別学習の成果を理由に挙げている。数学と理科ではその割合が大きい。

- 6、習熟度コース別学習を始めるにあたっての不安や疑問はどの教科についても

- ・選んだコースで自分が考えたとおりの学習ができるのかどうか
- ・成績をどうつけるのか
- ・テスト問題は同じなのか

という3点に集中している。特にどの教科でも、自分が選んだコースでよかったの

かという不安がもっとも割合が高い。ウ(テスト問題は同じなのか。)についてはBコースの生徒に不安が多くある。BコースではCコースの授業で取り扱う難度の高い内容について学習しないこともありうるという最初の説明に対する不安とも受け取ることができる。学習しないことがテストに出た場合に不利益になるのではないかという不安である。

これらの不安や疑問が授業を進める中で消えるような教師側の取組、あるいはその後生徒たちの不安や疑問は消えていったのかどうかを探っていくことも課題として残った。

7、質問6のこれから習熟度コース別学習に望むことの3点

- ・個別に習う時間を増やしてほしい。
- ・問題練習の時間を増やしてほしい。
- ・応用力のつく学習をしてほしい。

は、まさに習熟度コース別学習の目指すところである。生徒たちが本当に学習することの意義を見出し、授業の中でがんばって自分に本当の力をつけたいのだという意識の表れである。

8、最後の項目のコースの変更についての質問では、9割以上の生徒が今のままのコースで続行したいと望んでいる。質問5で自分の選んだコースでよかったのかという不安を持っていた割合が5割近くあったにもかかわらず、コース変更を希望しないという生徒がほとんどであるということは生徒たちにとって、自分が選択したコースの授業について自分が考えたとおりの学習が進んでいると判断した結果ととらえることができる。

しかし、コースの変更を希望する生徒はCコースの方が多い。この理由を見ていくと、自分の力にあっていないコースを選んでついでいくのが厳しいということを自分で理解した生徒だけである。それに対して、Bコースの生徒の変更の希望はもう少しが、がんばって応用力をつける学習をしたいと考えた生徒である。できることなら、授業の中で力をつけて自身をつけて、Bコースの生徒からCコースへの変更希望者たくさん出てくることが教師側にとっても励みになる。

成果と今後の課題

1、

習熟度コース別学習は生徒側からも教師側からも授業に対する取組意欲を引き出している。そして、生徒が学習し、学ぶ喜びを見出すという点では、人生の中で生涯にわたって学ぶことを身に着けていく姿勢を呼び起こす画期的な取り組みである。

2、2年生までの授業では、大勢の中の一人で1時間の授業の中で、十分に一人一人に声をかけられなかったが、一人一人に対応できる時間が増え、授業の中で生徒自身も授業に参加しているという実感を持てるようになってきている。そして、授業の中で理解

で理解できた、わかったということが増えてきている。

- 3、コース別の授業で人数が減ったこととあいまって、自分が理解できる内容と進度で進むので、自分が発言できたり発表できて、特にBコースでは自信を持って授業に臨めるようになった生徒が増えた。
- 4、Cコースでは、ハイレベルを選んだ自負もあって、真剣な取り組みで、以前より集中度も増し、ちょっと難しい内容が知識欲を刺激し、取り組み意欲を引き起こしている。家庭での学習も以前より増したと言う生徒もいる。
- 5、生徒がこの習熟度コース別授業を行うに当たって抱く不安「評価や評定について」は授業者側にとっても大きな課題である。特に評定については、進路の資料にもなるものなので、授業内容が違うのに同じテストで行い、同じような資料をそろえていかなければならないという点で難しい。評価と評定については今後、十分な討議を重ねて、生徒や保護者にも納得できるものが提示されなければならない。
- 6、 コースを生徒本人に任せた点について、授業者側からも大筋では評価されている。一部ではあるが、習熟度コース別授業についての理解が足りないのか、あるいは自分についての理解が足りないのか不都合を生じている生徒がいる。この授業形態をもっと効果あるものにするためにも、各コースの人数の調整がうまくいくようにするためにも、不適應を起こしそうな生徒については積極的なガイダンスを行う必要があったように思う。しかし、自分のことは自分で決定していくということは、主体的に人生を生きていくという点で非常に大切なことである。自分の生き方をいろいろな場面で選択し決定するためには、自分のことをしっかりと見つめて自分のことを理解することが判断のポイントになる。自分のことを本当に理解することが自分を成長させることができるということを自覚させるためにも、自分で不都合なことをはっきりと納得して自覚した時点での変更でもいいのではないかと思う。
- 7、 今後、授業者側にとっては、この習熟度コース別学習に沿った学習内容を検討し、その内容に沿った授業の方法、教材の開発が検討されていかねばならない。教科ごとに、BコースとCコースの授業の中の具体的な到達度目標を検討し、教科担当者間で共通にしていくことが必要であると思われる。たとえば、ある内容で6項目を設定するとしたらBコースは3項目をマスターする取組をし、Cコースは5項目を目指す取組をさせるというようなもの。それが今後の絶対評価にもつながっていくと思う。
- 8、 評定をする際に、コースが違えば、取り組み目標が違う上、評価資料も違う事があり、それを同じ枠の中で評定を進めることは、非常に難しいものがある。どのコースでも評価の基準とできるように、何をどのように客観化していくかを考えなければならない。